

# データでみる軽トラ市 (その21)

愛知大学 三遠南信地域連携研究センター長  
地域政策学部教授

戸田敏行

## 外国人共生の場づくりと軽トラ市

### ○外国人共生と軽トラ市

消滅可能性都市は、2014年に増田寛也氏を座長とする日本創生会議が公表したショッキングな呼称である。消滅可能性都市896のリストが公表された中央公論2014年6月号には、「真に有効な対策を行うためには、まず人口減少社会の実像を私たちが認識する必要がある。」と記されているように、実態認識が基本ということではある。しかし各自治体にとっては無視できない名称である。そして今年の4月24日に続編とも言える消滅可能性都市744が発表された。自治体数に見る限り、前回よりは都市数が減っているようであるが、依然として我が国の4割以上の市町村に消滅可能性の位置づけがあることに変わりはない。

当初発表の2014年以降、政府・自治体をあげて地方創生の諸事業がスタートした。だが、地方に行くほど、人口が小さな自治体ほど、人口減少の傾向は強い。筆者も、幾つかの自治体の地方創生事業に関与してきたが、なかなか有効な人口施策を見出し難い。そこで即効性ある施策として着目するのが大都市からの移住であり、外国人の定住である。日本人の移住もそうであるが、特に外国人の定住は、ただ人口という数値が増えるのではなく、



写真1 インドカレー店（雫石軽トラ市）

地域と如何に共生できるかが重要である。

そこで本稿では、外国人共生の場づくりとしての軽トラ市を考えてみたい。

### ○軽トラ市と外国人

軽トラ市と外国人の繋がりを考えてみれば、第1に出店があるだろう。定量的な調査を行っていないが、全国の軽トラ市を廻ると、外国人の飲食出店に気づくことが多い。写真1は、雫石軽トラ市のインドカレー店である。軽トラ上でのパフォーマンスもあって、軽トラ市の彩となる。

第2には来街者である。外国人の観光対象となっている軽トラ市をまだ見ないが、観光としての可能性もあるだろう。知人の欧州人によれば、ヨーロッパのマルシェとは趣が異なっており、面白いと言う。開催地域の物産などの特徴と地元の人との会話があるとすれば、インバウンド観光の一環に取り入れてみ



写真2 ウクライナ人来街者(掛川軽トラ市)

るのも有効かもしれない。観光型の軽トラ市も試行されているので、これからの視点であろう。現状では、外国人の来街者は住民ということになる。写真2は、ウクライナからの避難の方であるが、新しい生活の入り口に地域の人と交わる場が重要である。

そして、第3が意識的に交流を計画する共生の場である。「第8回全国軽トラ市 in 沼津まつ」のシンポジウムでは、下江洋行新城市長から「軽トラ市を外国人との共生社会を築いていくための交流の場に位置づけたい。」との発言があった。今後、外国人は諸都市で増加するであろうし、軽トラ市が共生の入り口になれば素晴らしい。

### ○新城軽トラ市での取り組み

新城市の人口は4月時点で41,568人であり、この20年間で1.1万人減少している。4月公表の消滅可能性都市は愛知県で7自治体であるが、新城市と後背圏である山間部2町1村、この4自治体がすべて消滅可能性とされている。新城市の外国人は1,216人で人口に占める比率は3%程度であるが、2014-2023年の10年間の社会移動をみると日本人が2,889人の減少、これに対して外国人は816人の増加



写真3 商店街に開店したベトナム食材店

である。日本人減少の約1/3を外国人が補っており、大きな意味を持つ。

国別では14か国、ブラジル人が455人と多いのだが、ベトナム人も290人と増加している。写真3は、軽トラ市を行う商店街の空き店舗に入居したベトナム食材店である。経営者であるゲン・ティ・トゥさん(写真)は、「新城市で働くベトナム人向けの食材店がないと聞いて、2023年12月に開店した。今後は軽トラ市にも出店したい。」とのことである。

軽トラ市で外国人共生を進めている新城市国際交流協会の田村太一会長は、「新城市の生産年齢人口激減から、あらゆる産業で人材確保が困難になっており、外国人の雇用は不可欠である。しかし、企業も市民も外国人に対して構えてしまう。軽トラ市は開放的な雰囲気、壁を感じにくい。一緒に食べることで心理的なハードルも下がる。」と語っている。

経営する建設会社のスリランカ人従業員が、これまでも軽トラ市に屋台を出しており、外国人と地域の来街者との交流に実感を持っている。なお、上記スリランカ人従業員はキッチンカーを購入しており、本格的に軽トラ市

## データでみる軽トラ市 (その21)



写真4 フードブース



写真5 中国人出店者 (両端)、田村会長 (左)、下江市長

参画の予定とのことである。

4月28日の軽トラ市では、国際交流フェス(図1)が開かれ、フードブース(写真4)や多彩なイベント(写真5)が行われた。当日は、近隣の市町村からブラジル人だけで100人以上が参加する広域事業となった。

当日の司会を務めた益子アイメさんは、京

都で学生生活を送るが、新城市で育った日系ブラジル人である。「こんなに多くの人が集まるとは思わなかった。外国人へのサポートが充実しているので、新城に転居してくる外国人もいる。大好きな新城が、外国人と日本人の壁のない社会として発展するように期待したい。」と話す。こうした若い人材の活躍は頼もしい。

また、田村会長は「外国人との交流から協働へ」としている。軽トラ市での交流を入口に、コミュニティカフェ(6月末オープン予定)、インバウンド観光、小中高教育での多文化共生などの多彩な協働事業推進を計画しており、軽トラ市とも連携をしていきたいと語る。

今回は、外国人共生の場づくりに果たす軽トラ市の役割を紹介した。既にある軽トラ市が、外国人共生に応用できるという展開であるが、その逆もある。外国人共生の課題が大きいとすれば、外国人共生を目的として軽トラ市をスタートして、同時に可動商店街としての役割を考えることも可能である。地域の持続的な発展に向けて、軽トラ市の果たす役割は広がる。

**国際交流フェス**  
@軽トラ市

4がつ28にち(にちよう)9じ~12じ  
@かめひめどおり

《フードブース》  
(ブラジル、スリランカ)

そのほか、ぞっかなどてんじ・ほんばい  
あります会

主催：新城市国際交流協会  
新城市字東入船115  
☎(0536)23-1940  
✉siea@tees.jp

《パフォーマンス》  
うた  
スンバダンス  
カボエイラ  
サックス など

図1 国際交流フェスのチラシ